

水稻 もみ枯細菌病について



図1 もみ枯細菌病の罹病穂

1 生態

もみ枯細菌病は、イネが細菌 (*Burkholderia glumae*) に感染することで発生する病害で、乳熟期頃から発生してもみが蒼白色に萎凋する。このとき、発病穂の穂軸や枝梗は健全で緑色を呈する。罹病もみは、その後灰白色ないし淡黄褐色となり、不稔あるいは秕(しいな)になることから減収する。秕となった玄米は、病斑部と健全部の境界が帯状に褐変することが多い。

本病は種子伝染することから、保菌したもみを播種すると、育苗箱で苗の立枯れや腐敗症が発生する場合がある。本田内では保菌苗や、被害もみ・わらといった収穫残渣が一次伝染源となる。はじめ、根の表面や下位葉鞘基部の表面で腐生的に増殖し、穂ばらみ期～出穂期頃に止葉葉鞘に移行して出穂期にもみに感染する。重症穂は周囲の株への二次伝染源となるため、発生が拡大する。

2 発生状況

本病の生育最適温度は30℃で、本田では出穂期前後の最低気温が24℃以上で発生が多くなる。

本病に対して強い抵抗性を示す品種は見出されていない。本病への感受性には品種間差があることが知られているが、もみの感受性が高い期間は開花からおよそ5日程度である。穂では出穂直後から開花が始まり、その後1週間程度かけて大部分が開花することから、ほ場全体での感受性の推移は1穂中のもみの日別開花率と出穂頻度から推定できる。イネの開花は気象条件に左右され、品種によっても異なることから、本病への感受性の高い期間を限定することは難しいが、およそ出穂期の4～5日後が最も本病への感受性が高く、出穂期の約10日後までは感受性が比較的高いと考えられるため注意が必要である。

本病による重症穂(発病もみ率30%以上)からは風雨により病原菌が周囲に拡散するため、早い時期から重症穂が多く見られ、イネの感受性が高い時期に降雨があると本病が多発する。

3 防除対策

(1) 健全種子の利用

無病ほ場から採種を行い、風選・塩水選により選種を徹底する。

(2) 耕種的防除

育苗期の高温・過湿は育苗箱での発病を助長するため、30℃以上の極端な高温や過湿を避ける。

本田では多肥になると本病の発生が多くなるため、適切な肥培管理に努める。被害もみ・わらは翌年の伝染源となるため、ほ場外に持ち出し適切に処分する。

(3) 薬剤による防除

育苗箱での発病を防ぐため、種子消毒を実施する。本田では穂ばらみ期～穂揃期に防除を行う。

薬剤の選定にあたっては、各薬剤の効果の違いに留意し適切な薬剤を選定するとともに、薬剤耐性菌の発達を避けるため同系統の薬剤を連用しない。